喫茶店とへっぽこ陰陽師

suou712

「えっと、じゃあいつもので」
　そういって僕はいつものテーブルに着いた。
　お店の一番端、自分の育った町が窓から見渡せる場所だ。ここ一月ほど、僕はほぼ毎日ここから自分の日常を見渡している。
「わかりました。砂糖とレモンは多めですね」
　葉月さんはにっこりと笑って、そう確認すると、ウエイトレスの衣装を揺らして奥へ入っていった。
　なんだかんだいって、この笑顔を見るためにかよっているのだ。いまだ自分が、そこから先へ進む勇気がもてないことを思い出すと、少々へこみはするが。
「ふう……」
　自分のふがいなさを再認識してしまったので、それを振り払おうと、僕は頭を振った。ちなみにこれは、いやな事を思い出したときにする、幼い頃からの癖である。
　見渡すと、既に店内に人はいない。もう閉店時間を過ぎているためだろう。
　僕が今からここで、いろんな意味で、ささやかだが幸福なひとときを過ごすことができるのは、マスターの好意によるところが大きい。そのマスターは、今はめずらしく奥で洗い物でもしているようで、その水音がかすかながら聞こえてくる。
　店内は、当然静かだ。初夏の長い日差しももう向こう側の山の向こうに消え去って、その残り日にかすかに物寂しいものを感じる。
「おまたせしました。アイスティーです」
　そんなことを適当に考えていると、葉月さんが、お盆にグラスをもってやって来た。
「でもこのところ、翔人さん毎日このじかんにいらっしゃってますよね」
　葉月さんは、いきなりなんでもない風にいったが、僕が顔を少し焦ったのを敏感に察知したのか、すぐさま、
「いえ、いつも同じ時間にいらっしゃるので、何かこの時間に気に入った事でもあるのかな～と思いまして・・・」
　と付け加えてくれる。閉店時間以降よくくるようになったのは、一つにはサークルの活動が終わるとこの時間になる、というのと、もう一つは閉店した後だと、葉月さんを独り占めして話すことができるからだ。彼女はこの喫茶店の看板娘でもあるので、普通の時間だとあまり話すことができない。（この二つめの方の理由が大きい）
　もちろん僕には『君に会うために毎日通ってるんです。』　なんていう、きざったらしい台詞が言えるわけもないので、僕は適当にごまかしてしまう。
「この、太陽が沈んだあとの町並みにはとても趣があるからねえ。おおかた、翔人くんもそれが目当てだろう？」
　適当に言葉をつないでいると、奥から出てきたマスターが気の利いた答えを出してくれた。そして、彼はそのままカウンターの向こうから荷物を二、三取り出すと、
「ちょっと、銀行行ってくるから～。
　翔人くん、ゆっくりしていってね」
　などと言って、カランカランとドアベルを鳴らして出て行ってしまった。ちなみに出て行く

間際、葉月さんからは見えない角度で、ウインクしていた気がする。
「そうなんですか・・・。
　確かにここからの景色はちょっとしたものですよね」
　山の中腹に立つこの喫茶店からの町の展望はかなりいい。
　葉月さんは窓越しに遠くを見つめてそういった。
　でも僕は町よりも、立って町を眺める彼女を見て、初めてここに来たときのことを思い出していた。
それは僕がへっぽこ陰陽師になったきっかけだ。

ポンッ
　ダダダダダ
　ポンッ
　フェンスの向こう側で二人の少年たちが地面を蹴って打ち合っていた。
「ねーねー、また起こったらしいよ。例の、謎の建物の破壊事件。」
「えー、ほんと？」
「けが人はいなかったらしいんだけど、また地面が掘り返されてたんだってー」
　えー、と言って笑い合う声が聞こえた。
　翔人の後ろを、何人かの学生が通り過ぎて行ったが、翔人は全くかまわなかった。
　ポンッ
　軽快な音を残して黄色の玉が弾かれる。
　ポンッ
　翔人はフェンスの向こうを足を止めてぼんやりと眺めていた。コートの端では数人かの男女が入り乱れて、雑談している。
「ねえ、君」
　かけられた声に振り向くと、長身で日焼けした少年が立っていた。
「なんですか」
「君、いつもみているね。よかったら、一緒にやらないかい」
　この球技にふさわしいさわやかな笑みを浮かべて彼が聞いてきた。
　一瞬、翔人の胸にわき上がる物があった。でも同時に、高校時代のことも思い出された。
「いえ。僕、才能無いですから」
　結局、翔人は軽く笑ってコートを後にした。

＊

　そもそも自分とはいかなる人間なのだろうか？いかなる才能があるのだろうか
　それは人間なら必ず一度はもつ疑問だろう。そして、たとえ、それを疑問に思ったことがないとしても、いったいどれくらいの人が、満足に答えることができるだろうか？
　そんなことを、その頃の僕は考えていたように思う。
　大学に入って、生活が一変するかと思ったけれどそんなことはなくて。毎日は今までと変わらず、通り過ぎていって。他のみんなには何かすべき事が見えているようなのに、自分には見えなくて。
　ならば、自分とはそもそもどんな生き物なのだろうか、と感じていた。

＊

　ザーッ
　そんな音とともに突然雨が降ってきた。
　翔人が、山の上にあるキャンパスから帰っている途中のことだ。

「うわ……、降り出してきたよ……」
　朝からの空を覆っていた厚い雲は、ついにその本領を発揮しようとしていた。
　ザーッ
　翔人は、突然降り出した雨がキャンパスに続く坂を洗い流していくのを見て、自転車を降りた。
　ただでさえ、道が古く歩道がないので、人身事故が多いのだ。もっともそれは最近の顕著になっていることだが。
「参ったなあ」
　一応事故するよりはましだが、やはり雨に打たれるのはいやだ。駆け抜けるよりは、ゆっくり歩いた方が総じて雨に打たれる量は多いからだ。
　一人つぶやいて、翔人は再び歩き始める。
　この道は、とくに雨が降ってからのスリップ事故が多い。雨に打たれてもせいぜい風邪だが、事故に会えば、そんなことではすまないに決まっている。
　ザーッ
「ん？」
　カーブをあらかた曲がり終えたとき、カーブの下に建物が見えた。
　雨の中で、その建物はひどくくたびれて見えた。
　さらにもう一つカーブを曲がって降りていくと、道から奥へ入っていく小道と、さっき見えた建物が見える。小道の脇には、青地に黄色のカギが描かれた看板が光っている。
　こんなところに喫茶店などあっただろうか？と、翔人は立ち止まってしばし考える。近づいてみると看板はきれいに磨かれていて、雨に打たれながらもまばゆく光っている。普段からこの看板があると仮定すると、いつも自分はこの看板を見逃していたと言うことになる。
　いつもこのあたりは自転車で汗水垂らして駆け上ったり、駆け下りたりしているから気づかなくても仕方ないかもしれない、と適当な理由をつくりつつも、翔人は多少自分の注意力のなさにげんなりとしてしまう。
　ザザーッ
　雨がひときわ強くなった気がして、翔人はとりあえず雨宿りしていくことにした。
　歩き始めて、両脇に花壇があったり、意外と小道が整備されていることに気づく。建物も最初はくたびれた印象が強かったが、近づいてみるとよく手入れされていることが分かる。入り口脇の看板には『Hikage』と書いてある。
　ガチャリ
　音を立てて自転車を止めると翔人は庇の付いたポーチの下に入った。雨を払って、光沢のある木の扉を押し開けて中に入った。
　カラン、カラン
　ドアベルが小気味のよい音を奏でる。
「いらっしゃいませ！」
　中に入って翔人が見たのは、超美少女だった。艶やかな肩で切りそろえられたショートカット

と袖口から除く白い華奢な腕が、まるで体をつつむ黒と白のエプロンドレスのように、美しいコントラストを描いている。
　大きな瞳は長いまつげと相まって彼女の魅力を一層強めている。
「こちらへどうぞ。」
少女が、可憐な声で翔人を店の一番奥、窓際の席に導いた。そのまま彼女はいったん店の奥に入っていった。
　外見通り、やはり店内は古いながらもよく手入れが行き届いていた。青い暖簾が、おそらくキッチンであろう奥と店を仕切っている。　カウンターではマスターとおぼしき人が、何か手を動かしていた。髪が薄くなりながらも、好好爺然とした人物だ。
「どうぞ」
　少女がいつの間にか盆に水と乾いたタオルを持って戻ってきていた。
「あ、ありがとうございます。」
　まったく不意に声をかけられて、またその話しかけてきた人物が、凄まじいほどの美人であったということに翔人は、そう答えるのが精一杯の状態だった。
「急に激しく振ってきましたからね。大変だったでしょう？」
　そういって、彼女がにっこりと微笑むと翔人は、もらったタオルでぬれた頭を拭く手もとめて、ただ呆然としてしまった。
「えと、レモンティー。アイスで」
　翔人は、なぜかまともに彼女の顔が見れなくなって、早口にそう注文した。
「お砂糖はどうしますか？」
「たくさんで」
「かしこまりました」
　彼女の問いにも翔人は深く考えることもなく答えた。実際、頭の中が整理できていなかった。
　いったいどうして自分はこんなにも緊張しているのだろうか、と。
　ウエイトレスの彼女が裏に消えると、翔人はひとつ息をはいて、頭をふった。
　そのとき、さっきまでカウンターの影で手を動かしていたマスターらしき人が、こちらをみてにやけているのが目に入った。
「どうかしましたか」
　翔人はその訳知り顔が気に入らなくて、ぶすっとした声で彼に尋ねた。マスターらしき人は
「いやあ、若いなあとおもってねえ」
　とますます笑みを深くして答えてきた。そのあと、かなり小さな声で、
「君がここを見つけるなんて、幸運というか、不運と言うかねえ……」
　と、いったのが耳に入った。翔人はどういくことかさらに聞こうとしたが、ちょうどそのとき先のウエイトレスが
「お待たせしました。レモンティーです」
　と、言ってグラスを持ってきたのでタイミングを逸してしまった。結局その日はそれがどういうことなのか聞けなかった。ウエイトレスの少女もまともに見れなかった。
　幸か不幸か、雨はわりとすぐに雨は霧のような小雨になったので、翔人は紅茶を飲み干すとそ

のまま勘定を済ませ店を出た。
　とてもレモンが入りすぎなレモンティーだった。

＊

　カラカラカラ
「ただいま～」
　引き戸の玄関扉を開いて家に入ると、ややあってから「おかえり～」という声が聞こえた。連続して起こっている謎の建物倒壊事件は、いまだ死傷者は出ていませんが、犯人が捕まっておらず、その目的も不明です……などというニュースが流れているが、翔人はあまり気にしなかった。地面が掘り返されていると言うところが耳に入ってきて、物好きな人もいるなあ、などと思ってしまう。
　翔人は持っていた鞄を長い廊下の先の自分の部屋に置くと、そのまま庭に出た。
　翔人の家は大きい。抽象的な意味でなく、現実的な意味で大きいのだ。何でも、古くからの家らしく、敷地自身もさることながら、家もでかい。その割に、父はただのサラリーマン、母はただの専業主婦だ。
　古い家なので隙間風は入ってくるし、使わずただ物置になっている部屋もあるし、何より税金が高いと、日々両親は嘆いている。
　分不相応にでかい家なのだが、それでも土地を売るつもりはおろかリフォームするつもりもないらしい。
　その無意味に大きい家の無意味に大きい庭には、昔ながらの土蔵が建っていて先祖伝来（本当か！？と思う）の書物が眠っている。
大学に入学して以来一月、翔人はこの倉庫に入っては別段何をするでもなく、適当に本を開いてみては時間をすごしていた。
「よっと。」
　翔人はいつもどおり跳ね上げ式の階段を背を伸ばして下ろした。ちなみにこの倉庫は二階建てで、一回部分の方が天井が低くなっていて、特別背が大きいわけではない翔人でも天井に備付けられた階段に手が届く。古い書物などは皆二階にあり、二階は吹き抜けになっているので開放感があり翔人もここで時間の大半を潰す。
　グラ……
　翔人が階段を下ろしたそのとき、突然地面が揺れた。ちょっとした地震だ。
「うおっ！」
　いきなりの事に、翔人は思わず声を上げる。
　ドサッ、ドサドサッ
　幸いなことに地震は揺れもさほど大きくなくすぐに収まったが、まだ見ぬ二階部分からはそんな不穏な音が響いていた。
「あちゃー……」
　やはり、と言うかなんと言うか、翔人が階段を上ったその先で見たものは吹き抜けの天井まで

届くかという本棚から飛び出たであろう、たくさんの本だった。
「こりゃあひどいね」
　思わず一人ごちる翔人。家の人間はまずここには立ち寄らないので片付けるのは自分しかいない。
　天を仰いでいても仕方がないので、翔人はとりあえず本を集めることにした。
「ん……？」
　とりあえず本棚に戻そうと拾い上げた本を見て、翔人の口から言葉にならない声が漏れた。その鮮やかな色が逆におどろおどろしさを主張する表紙が目に入ったからである。
　『八式使役術』『図解・魔法陣・五芒星』『実録観測術天文編』『陰陽結界入門』etc……
　どれもこれも怪しげな本である。しかもそこらにある三文オカルト本と言うよりは、その筋の人が書いたような、専門書のようなにおいがする。どちらかというと普通のそういった本よりもっとずっとずっと、関わり合いたくないような気配のする本たちだった。
　いったいこの本は誰がなんの目的で収集し、どうしてこの書庫にあるのだろうか？
　翔人は崩れて山積みになった本を見下ろして、ただ腕を組んで唸ることしかできなかった。

＊

「えっと、書庫にある本のことなんだけどさ」
　その日の夜、食卓で父と母、それに弟を前にして翔人はいったんそこで言葉を切った。
「ううん？」
　翔人の父、武人（たけと）はおかずの豆あじの天ぷらをもふもふと、口いっぱいにほおばりながら返した。
「あそこの本って、誰が集めたもんなの？」
　翔人が聞くと、武人はしばし考えて
「たしか俺の曾爺ちゃんだと思う。だからおまえの曾曾爺ちゃんだな」
　と答える。
「どうして、そんなこと聞くの？」
　翔人の母、美佳（みか）が聞いてくる。
「いや、ホントたくさんのほんがあるからさ、ふとそう思ったんだ」
　オカルト本がたくさんあったから、一体誰がそんな怪しげな本を収集していたのか疑問に思ったなんて、ご先祖様の恥をさらすような気がして、翔人は適当に答えをごまかした。
「ふーん」
　どうやら翔人の答えに母は満足したらしく、それ以上追求してくることはなかった。
「そういえばご先祖様の話で思い出したよ」
　翔人が、うわこの豆あじの天ぷらうまいなそれにしてもあんな怪しげな本ばっか一山も集めるなんてうちのご先祖様はいったい何を考えているんだ絶対本人もなんか怪しげな人だったに違いないというかむしろおかしな神経だったに違いないあんな怪しげなものを信じて大量に集めるな

んて、等と翔人が夕飯をつつきながらご先祖様に対して大変失礼なことをとりとめもなく考えていると、武人がわりかし真剣な表情で翔人と、弟の輝人にむかっていった。
　嘘じゃないぞぉと、別に否定するわけでもないのに前置きして。
「うちのご先祖様は式神とか使役したり、妖怪とか幽霊とかを退治できる本物の陰陽師だったらしい」
　どうやら、怪しげなものを信じているのは曾曾祖父だけではないらしい。
　翔人はおもわずため息をついた。

ある夕方のことだ。翔人はいつものように喫茶店にいた。はじめて翔人がここを訪れてから一週間ほどたっている。席は最初にウエイトレスが案内してくれた場所。
　その場所は翔人がくると、なぜかいつも空いていて、いつの間にか翔人は常にその場所に座るようになっていた。そこはもう翔人の居場所になろうとしていた。
　その日は、うるさい客がいた。カップルだろうか、若い二人組である。
　男の方はボウズのように髪が短く、それもくすんだ金色に染めている。だらしなく椅子にふんぞり返り、ピアスのたくさん付いた耳にはイヤホンをしている。そこからチッチッチッチッチと奇怪なリズムが大音量で流れ出してきていた。
　女の方は長髪で、完全に茶色く染め上げている。化粧の濃い顔で携帯のテレビを最大音量できいていた。スピーカーでである。おまけにバラエティでも見ているのか時折大音量で『ははは、うっそーありえなくない！』などと誰に言うでもなく叫んでいる。
　周りにも客がいて、皆一様に騒音被害に迷惑そうな顔をしているが、結局何も言わない。　翔人も例外ではない。なにせ相手はこの町の治安が悪くなって、どこからともなく出てきたちんぴらたちである。たとえここでどうこうしても、今度は仲間をつれて仕返しにやってくる。そういう連中である。関わらない方がいい、と自分にいいきかせ翔人も無視し続ける。
　カウンターを見るとマスターは何食わぬ顔で、手を動かし続けている。もちろんちんぴらどもを相手に何か言うつもりは毛頭無いようだ。
　チッチッチッチッチ
　ははははは、ありえなーーい
　いつも、ここにある緩やかな、けれどはつらつとした空気は微塵もない。そんな事を翔人は思っていると突然男の方がこちらをにらんで、吠えてきた。
「テメェ、なにガンつけてんだぁ？オレらになんか文句でもあんのか！ああぁ！」
「べ、別に何でもありません」
　翔人は、そう答えることにかなり抵抗を感じていたがどうしようもなかった。翔人には仕返しにやってくるであろう人数を跳ね返す力はもとより、この男一人を相手にすることすら危うい。
「じゃあ、ガンつけんじゃねえよ！」
「かずくんこわーい、もういいじゃんあんなヤツ！」
　まだこちらを睨みつけている男に、女がとりなす。そこへ
「お客様？店内ではお静かにお願いします」
と注意する影があった。あのウエイトレスだ。
　そう言って彼女はごく自然に男の耳からイヤホンを外し、女の携帯を閉じた。
「他のお客様のご迷惑にも成りますので、ご遠慮ください」
　彼女の声は決して大きくなかったがそれでも周りを飲む込む何かがあった。
　その一言でカップルは静かになった。その後は普通にお茶をのみ、普通に会計をして出て行った。
　たぶん彼らは悪意を投げつけられる事になれ、普通に注意されることになれていなかったのだろう。

＊

　また、ある日の夕方のこと。翔人はまた、いつものように、いつもの席で時間を過ごしていた。そして、目の前には子供たちがはしゃいでいる。
　どうやら、今日は近くの幼稚園児が、遠足か何かでやって来ているらしい。詳しい事情は翔人にはよく分からないが。
　子供たちはそこら中で遊び回っていて、保母さんたちの言うことをちっとも聞かない。キャーキャーはしゃぎ回ったり、テーブルの上のコップを倒したり、と忙しい。
　ウエイトレスの彼女も忙しい。そういった子供たちもお客さんとして扱い、とても丁寧に対応していく。
　ふと、女の子が言った。丸いめがねをかけた、同年代でも小さい方の子だ。
「わたしも、おおきくなったらおねえさんみたいになる！」
　翔人もおもわず微笑んでしまった。少し舌足らずなところがなおさらかわいい。
　が、すぐに同年代にしては大きな男の子がやってきた。
「ばーか！お前なんかになれるわけないだろ」
「そうだそうだ！」「むりだ！」取り巻きなのか、周りの子もそんなことを言い始める。それで、その女の子は泣き出してしまう。
　ここは年長者として何か言うべきだろうか、と翔人は考えた。保母さんたちもいるが……。そんな時だ。割り込む声が聞こえた。ウエイトレスだ。
「だーめ、そんなこと言っちゃダメでしょ」
　彼女の声は、周りを飲み込んでいた。
「大丈夫だよ？わたしじゃなくて、もっともっと凄い人にでも、きっと努力すればなれるよ」
　そういって彼女はしゃがんで女の子を抱きしめた。女の子は、ひっく、ひっくとしゃくりあげながらも「うん、わかった」と言っていた。
　ウエイトレスは女の子が泣きやんだことを確かめると、今度は男の子たちに向き合った。　しゃがんで目線を合わせて彼女は問いかける。
「あなたたちもだよ？」
　怒るでもなく。質問するでもなく。彼女は子供たちに話しかける。男の子たちは、叱られると思っていたので拍子抜けしたようだった。
「あなたにも、なりたいものあるでしょう？」
　彼女が一番最初にいやがらせを言った子に問いかけるとその子は元気よく答えた。
「しょうぼうしゃにのるひと！」
「やきゅうせんしゅ！」
「うちゅうひこうし！」
　きいてきいて、と言わんばかりに子供たちが答える。彼女はその一つ一つをきいて、うんうん、と頷くと
「がんばれば、きっと成れるからね。がんばろうね」

と、言い聞かせていた。翔人はそれを聞いて昔を思い出していた。なも思い出せぬ先輩と同級生と、そして自分のことだ。

＊

　高校時代のことだ。
　この年代の子にはよくあることだが漫画を読んで、テニスがしたくなった。翔人はテニス部の部室に来ていた。新入生の仮入部気管だったので、翔人はすぐに仮入部ができた。
　ブンッ、ブンッ
　翔人が素振りをしていると、先輩の一人が声をかけてきた。三年生の先輩だ。筋肉のついた長身に艶やかな黒髪が印象的だった。
「君ずいぶん一生懸命だね」
　そうだった。他の一年生たちはもう練習をやめてコートの隅によって雑談している。練習をこなしているのは翔人だけだった。
「うまくなりたいですから」
「そうだね。それには練習しないとね」
　楽しい先輩だな、と翔人は安心した。

　そんな日々が一月ほど続いた。その先輩は努力家だった。
「がんばれ」
　先輩はいつも口癖のようにそう言っていた。
いつも一人練習している翔人に声をかけてくれるのはその先輩だった。いつも汗だくだったが、爽やかだった。
　一月。その間に翔人は格段にうまくなっていた。練習試合で、さぼっている二年生すら圧倒するほどに。
　そんなある日のことだ。
　転校生がやって来た。翔人を同じクラスだった。そして同じテニス部に入部した。
　彼はテニスは少しやったことがあるだけだと言っていた。
　すこしして、顧問が部内で練習試合を組む、と言いだした。一応トーナメントで、今度の大会のオーダーを決めると言うことだった。
　翔人の相手は、転校生の彼だった。
　結果は歴然だった。翔人は一ゲームも取れず完敗した。
　才能の差だと、翔人は痛感した。彼には技術的な面で荒削りなところが多いが、その身体能力では凄まじかった。
　それでも翔人は、日々練習を続けた。

　それから数日して、部内のトーナメントが終わった頃。
「やっぱおまえ才能ないよ。ずっと練習してても意味ないよ」

例の転校生に言われた言葉だった。コートの隅でずっと練習を続けている翔人の前に来て言い放ったのだ。もともと、翔人は運動神経において、秀でているとはいい難い。それは他の一年生と比較しても言えることだった。そして練習は、それを埋めるための物だった。
「才能がなくても、がんばるよ」
翔人はそう反論して、部室棟に向かった。
「そのうち、他のヤツにも抜かされるよ」
余計なお世話だ、と翔人は思った。

「え？先輩、どうしたんですか」
部室にはいると、あの先輩がいた。春の日差しが一つだけのの窓から入り込み、薄暗い部室を照らしている。
逆光のなか、先輩の体はなぜか小さく見えた。
「見ての通り、私物をまとめてるんだ」
たしかに先輩はラケットやらシューズやらいろいろな物をまとめていた。
「どうして……」
「やめるんだよ」
先輩は顔を伏せていた。
「この前の練習試合、二回戦で負けてしまってね。
試合中に肘に違和感を感じて医者に言ってみれば、とてもまずいことになってるらしい。おれは馬鹿だからよくわからないが。
もうテニスはできないそうだ」
顔を上げると先輩は笑っていた。それは諦めた人の物だった。
「じゃあ、もういくから」
そう付け加えて、先輩は部室を出て行く。翔人は、声をかけることができなかった。

＊

そのことは翔人にいろいろなことを教えてくれた。そう言う意味では貴重な体験と言えなくもない、と翔人は自嘲気味に笑う。
結局、翔人はそれからすぐに部をやめた。その後は帰宅部だ。
でももしも、もしもその時彼女がいたら。「がんばればきっと成れる」
そう言ってくれたら。自分はテニスを続けていられたのだろうか。そう考えて翔人は笑ってしまった。結局、続けられなかったのは自分に才能がなかったからだ。続けていても惨めになるだけだ、そう思ったからこそ翔人はやめたのだ。
いつの間にか、園児は帰っていき彼女はそれを見送っていた。

＊

　ある日は、近くの老人ホームのおじいちゃんたちが訪れ。ある日は奥様方が訪れ。そんな日々が続いていく。
　あのウエイトレスは、おじいちゃんに昔話をされれば耳を傾け。奥様のワイドショーに聞き入り。
　いつもやわらかな笑みを絶やさぬ少女だった。その姿をまぶしいな、と翔人は感じた。

「あー、すみません、お勘定おねがいしますー」
　そんなことがあって、また一週間ほどたった。翔人は毎日喫茶店に通っていた。
　翔人が出入り口脇のレジの前で声を上げるとすぐにはーい、と片付けをしていたウエイトレスが返事をした。まだ客が去ったばかりのテーブルで食器を片付ける手を止め、スカートの裾を揺らして小走りにやってくる。
　ちなみに、どうやらこの喫茶店の従業員は、店のマスターとこのウエイトレスしかいないらしい。
　今は昼も過ぎているし、まだ子供が間食をする時間（だれが決めたのだろうか？）には間があるので、店にはほとんど客がいないが、昼頃くるといつもすごく込んでいる。
　こんなところにある隠れ家的な喫茶店よく知っているな、と正直翔人は思う。その混み合いの割に従業員は、人件費削減のためなのか、二人しかいない。さらに言えば、マスターはいつもカウンターの向こうで何かしているので実質働いているのはこのウエイトレス一人だけだ。
　大変だなあ、と人ごとのように翔人は思う。
「一人で大変ですね」
　伝票を見てレジを打つ彼女を見ていると不思議と思っていることが口を突いて出た。
　ウエイトレスは突然関係ないことで話しかけられてすこし驚いた風だったがすぐにいつもの暖かい笑顔を作って
「確かに忙しいですけど、楽しいですよ？」
　と答えてくれた。
　彼女が金額を告げたので金を払おうと財布を開くと後ろでカラン、カラン、とドアベルが鳴った。振り返ると、黒い奴が入ってきていた。
　おそらく客だろうが、怪しすぎる。もう初夏だというのに大柄な体を真っ黒なロングコートでつつみこみ、同じく真っ黒な中折れ帽を頭にかぶっている。真っ黒な髪は長く、適当に流されている。目は向こう側の見えないサングラスで覆われ、手は殺人犯が身につけるような真っ黒な手袋が覆っている。
　とにかく何から何まで黒一色。気のせいか僅かながら露出している肌ですら、黒ずんで見える。
「お客さん？」
　ウエイトレスに呼びかけられて、翔人は自分がしげしげと黒い人を観察していたことに気がついた。その黒い人は特に気にした風もなかったが（後から考えればあのような目立つ格好をしているのだから、観察されることに慣れていたのかもしれない。）翔人はそそくさと店を出た。

＊

「なー、しってる？」
　本日一番最後の授業が始まる前の階段教室。学生がそれなりに詰まって座り、そこら中で無駄話に花が咲いている。そんな中翔人が、
　あー、やっぱりあのウエイトレスの子にお客さんては呼ばれたくないなあってかあの子の名前

はなんて言うんだろでも俺にあのこの名前を聞くなんてそんな大それた事できるかなあ、
　などとまた翔人が益体もないことをうじうじと、もんもんと、ぐだぐだと考えていると、不意に前で隣の女子学生に話しかけている学生の声が耳に入った。
「なに？」
　翔人はいったいなんだろう、とおもってその話を聞いてみたくなったが、女子学生の方はそう思わなかったらしい。あからさまに邪険な声で返事をした
「じつは、近頃この大学の周りで黒ずくめの変質者が目撃されてるらしい。」
「別にさー、変質者なんて、今時珍しくもなくない」
　女子学生が適当に応えると、男子学生はちがうんだねー、と声を上げた。
「この変質者、そこら中で『このあたりに結界の呪符はないか』って聞いて回ってるらしい。しかも『知らない』って答えても、しつこく『本当だろうな？』って血走った目で聞かれるらしい。
　それで最初に話しかけられた女子が、気味悪がって通報してな。それ以来不審人物として警察もいろいろと調べたり、巡回したりしてる。
　実際見た、っていってる教授や学生がかなりいるのに、未だに警察官には見つかってすらいない。
な？おもしろいだろ？」
　男子学生が一気にまくしたてた。
　最初は講義が始まるまでの暇つぶしに聞いていた翔人だったが、ふと、前日みた男の姿が脳裏をよぎった。
「ええー、べつにおもしろくもないよー」
　などと女子学生が答えて、二人がははは、と笑い合っている。どうやら男子学生の苦労が功を奏したらしい。男子学生は、彼女の気をひくのには成功したようだ。
　その間も翔人の頭の中にはあの男が占めていた。べつに昨日のあの男は何も言ってなかったような気がするが……。
「でもさ、でもさ別に捕まらないのは偶然か、そうでなかったら、ただ警察が無能なだけじゃない？
　それに、黒ずくめだったらサングラスとかしてたんじゃないの？」
「うん、そう聞いてるけど」
　女子学生に男子学生が頷いた。それを聞いて、女子学生は軽く笑って
「だったらさ、おかしくない？
　サングラスしてるのに目が血走ってるって、なんでわかるのさ？」
　翔人は自分の中にあるもしかしたら、という可能性を振り払うように首をブンブン、と勢いよく振っていたが、それを聞いて勢いよく立ち上がった。
「うおっ？」
「なんだよ？」
　周りでいきなりの行動にとまどいの声を上げる者もいたが、翔人はかまわず、そのまま教室

を走って出た。
　すぐに教室の喧噪は聞こえなくなった。

＊

はあっ、はあっ、はあっ……
　階段教室を飛び出して自転車に乗り、山の中腹まで一気に駆け下りてきた。坂での重力に従った加速が生ぬるい気がして、下り坂でも立って自転車をこいだ。
　もうすぐ山のかげに隠れるか、という陽の日差しのなかで喫茶店は、何も変わらずそこにあった。
　ただ一つ、若く見慣れない男が立っていることをのぞけば。
　彫りが深く、整った顔立ちのなかなか格好いい男だ。ただし、その服装が台無しにしている。男は平安貴族の略服、確か狩衣と言うんだったか、を着ていた。
　べつにここで特別な催しが成されているわけでもないのに変な格好をしているので、明らかにイタイ人である。とりあえず関わらない方がいい、とおもって翔人は無視して店にはいることにした。
「何を焦っているのですか？」
　すれ違いざまに話しかけられ、思わず翔人は足を止めてしまう。
「心配しないでください。まだ、時間はありますから。」
　翔人はこの見知らぬ男が、いったい何を言っているのか、まるでわからなかった。
　だから、翔人は男を無視して喫茶店の扉を開けた。
　カラン、カラン
　ドアベルがいつもと同じ、小気味よい音を　奏でる。
「いらっしゃいませー」
　いつものウエイトレスが、いつものようにはつらつとした声で、迎えてくれた。
「おっ、君か。今日はいつもよりも早いね」　マスターもいつもと変わらず、カウンターで何かしながら挨拶してくれる。
「えっと、さ。昨日黒ずくめのひとが来てたよね？」
　翔人が案内された席で、いつものように注文してから、ウエイトレスに尋ねた。
　翔人の問いかけにウエイトレスは、一瞬えっという顔になって、
「昨日はそんな方、いらっしゃらなかったと、思いますよ。」
と柳眉を寄せていった。
「本当に？」
　思いがけない回答に翔人はおもわず問い返してしまう。
「はい、本当ですよ？嘘を言っても仕方ありませんし。」
　ウエイトレスは笑って念を押してくれた。
　のれんをくぐって奥へと入っていく彼女のすらりとした背中を見送って、翔人は席を立った。
　素早くカウンターの前まで歩いていく。カウンターに近づくと、マスターが折り紙を追ってい

るのが見えた。しかし、このマスターいつも何かしていると思ったらこんな事をしていたのか、と少しあきれる翔人。
「マスターも見てませんか？さっき僕が話していた黒ずくめの人。」
　店の中には三人しかおらず、翔人の声はよく通るため、当然このマスターにも聞こえていたはずであるが、翔人は一応聞いてみた。
「ぼくはお客さんのことはあんまりみてないからねえ」
　マスターの答えに、この喫茶店は大丈夫だろうか、と思わず翔人は心配になってしまうが、とりあえず翔人は席に戻った。そして考え始める。
　男は間違いなくこの店に来た……よな？
　でも、ウエイトレスは来ていないという。
　ひょっとして自分の見間違いだろうか、という考えが翔人の脳裏をよぎる。
「いや、間違いなくいた。」
　気づくと翔人は小さくつぶやいていた。それでも自信は持てない。
　翔人は考える。
　仮説を立てよう。あの男が俺の見間違いだとする。この場合、特に問題はない。自分が幻をみた、というだけに過ぎない。
　もし、あの男が自分の見間違いじゃないとする。この場合、葉月さんが男に気づかなかった、ということになる。
　これはかなり問題だ。あのウエイトレスさんは、目の前を人が通りかかっても気づかない鈍感女ということになる。
　いや、通りかかるだけではない。自分が帰るとき店に客はほかにいなかった。ということは、このさして広くもない空間におそらくあの男が、一人ぽつん、といたにもかかわらず、葉月さんは気がつかなかった、ということだ。（この際だからマスターのことは放っておく）
　いったい、どういうことだ。じつは白い粉でも常駐しているのだろうか。まさか、この店は人がいない時間を利用して、そういう商売もしている、ということだろうか。翔人の不安はだんだんふくらんでくる。
「おまたせしましたー。レモンティーです」
　そこでウエイトレスが盆を抱えてやって来たので翔人は、はっ、と我に返った。
「どうかなさいましたか？」
　彼女が小首をかしげて尋ねてくる。そのやわらかな仕草に、翔人は思わず焦った。さっきも変なことを聞いたし、このままでは白い粉を常駐しているのは自分と思われてしまう……！っと。
「なな、な、なんでもないです。」
　焦ったため、おもわずかんでしまった。翔人は恥ずかしさのあまり、ますます赤面してしまう。それに彼女はクスリ、と笑い声をもらした。
「私、朝山葉月っていいます。」
　ウエイトレスが、空いた盆を両手で胸に抱えるようにして、言った。
「近頃、よくいらっしゃいますよね。常連さんだし、お名前をお聞きしてもよろしいですか？」
　葉月、と名乗った彼女が、透き通った声ではにかむようにそう続けた。

「つ、土門、土門翔人（つちかどしょうと）　っていいます。」
　ウエイトレスに、彼女の名前を教えてもらい、かつ自分の名前を伝えられた、ということに翔人は舞い上がっていた。いままで悩んでいた事もすべて忘れて。

翔人にとって事態が急変したのはその直後のことである。
　カラン、カラン
　ドアベルを鳴らして翔人が店を出ると、平安風の男はまだそこにいた。つまり店の扉のポーチに立っていた。
「やっと出てきましたね」
　男は軽く笑った。
　翔人は今までただ少しイケメンなだけのこの男に、どうして漠然と薄気味悪さを感じてしまうのかわかった。
　現実味がないのだ。
　何もかも。男が着ている狩衣には汚れやしわといえるものは全く無いし、はいている履き物には泥はおろか曇りすらない。
　かぶった烏帽子は曲がることもなくまっすぐに伸び、側頭部の黒髪は丁寧になでつけられ、日に当たっていないかのような透き通った肌と鮮やかなコントラストを成している。
「僕に何かようですか？」
　翔人は警戒心を隠しきれずに聞いた。
「用がないのに待つ人は、果たしてこの多様化した世界にもいるのでしょうかねえ？」
　男が歌うように答えた。まるで、声変わりしていないかのような声に翔人は驚いてしまう。
「用がないようなので、帰ります。」
　翔人はもったいぶった物言いへのいらだちを隠そうともせず言い放ち、同時に店の前に止めてあった自転車に向かって歩き始めた。
　男は黙って少し顔を下に向けて首をゆっくりと左右に振っていた。翔人がカコン、と音を立てて自転車のスタンドを跳ね上げると、男が翔人の背中越しに声をかけてきた。
「あなた、この喫茶店をつぶしたいですか」
　思いがけない言葉におもわず見返ると、男はすぐ後ろにいた。
「どういうことですか。」
「どうやら話を聞いてくれるようですね。」
　翔人の質問に男は子供のように破顔した。

＊

「あなたはこの町の成り立ちを知っていますか？」
　二人は坂を並んで下り始めた。翔人は自転車を右側でひいて、男が翔人の左に並ぶ。男二人と自転車一台が並ぶため、さして広くもない歩道をふさいでしまうがこの際仕方がない。車道にはみ出してはいないのでまだいいだろう。
　男は自分を『土御門実行』と名乗った。翔人が名乗ると、実行は満足そうに一つ頷いて、翔人にたずねたのだった。
「知ってるよ。たしか斉藤影宗とかいう戦国武将が、自分の本拠地にするために攻めるに難く護に易い場所を選んで城を気づいた。そんなとこだよな」

　実行が敬語はやめてほしいと言ってきたので、翔人は警戒心を解いたわけではないが、くだけて話し始めた。
「何もないところに町を作る、というのは大変なことです」
　よく知っていますね、と笑ってから実行が　言った。
「もともと人が住んでいるところ、というのは必ず『気』の流れがあります。その流れは人をひきつけるものであり、この特質があるからこそ、人が集まり町ができるのです。
　そしてその流れは、人々の生活に大きな影響をもたらします。たとえばラッキー、ツキ、幸運なんて呼ばれてるのもその一例ですね」
　人には敬語を使うな、というのに自分は敬語のままか、理不尽だな、と思う翔人を気にした風もなく、実行は続ける。
「ですが、人工的に作られた町にはその流れがない。このままでは町はできず、人々は離れていってしまう。
　そこで登場するのが陰陽道と私たち陰陽師ですね。支配者に依頼されて、当時の凄腕の陰陽師が町にいくつか細工を施しました。
　すなわち城のあった場所を中心として八角形を描き、その頂点に人工的に『気』の流れを生み出す呪符をうめました。」
「難で八角形なんだよ」
「八角形が最適だからです。詳しいことを説明しても分からないでしょうから、そういう物だ、と思っていただければ」
　長く、非科学的と思える説明に翔人は耐えきれなくなって、実行の話に割り込んだ。翔人の問いに実行は、多少困ったように答えた。
「それが、さっきの喫茶店とどう関係するんだ？」
「わかりませんか？」
　含み笑いのような表情を浮かべる実行。翔人はそっぽをむいて
「わからないね」
と答えた。
「自分で考えてください」
　むっとして翔人が隣を見ると、すでに実行の姿はなかった。

＊

　翔人は帰り道を自転車をひいて歩いていた。既に日も暮れて時間がたち、あたりを夜の闇が覆っている。
　だいたい、この科学全盛の世の中で『気』がどうのこうのいわれてもなあ。
　実行がいきなり姿を消し、翔人は一人また歩き始めたが、やはり実行の話を信じる気持ちにはなれない。それが翔人の正直な気持ちだった。
　ところが、翔人の考えに反して、信じざるを得ない状況は実行の登場と同様に、突然にやってきた。

カラカラカラ……
タッタッタッタっ……
タッ……タッ……
翔人が押す自転車のタイヤが回る音。翔人が歩く音、それに小さいながらも他の誰かの足音が混じっている。それが後ろからついてくる。まるで自分を尾行でもしているかのように。
まさか……ね。
そこまで考えて、翔人は心の中で苦笑した。
ばかげている。変な話を聞かされて、変な奴に後をつけられる。そんなのガキじゃあるまいし、まともに信じられるはずもない。
気のせいだ、と自分に言い聞かせて翔人は何に気づいた風もなく歩き続けた。
カラカラカラ……
タッタッタッタッ……
タッ……タッ…
足音は小さいがひたひたと、翔人についてくる。普通の人なら気にもとめないような小さな足音。自分だっていつもだったら、そんな足音気にもとめないだろう。だが、おかしな話を聞いて、翔人は混乱していた。
カラカラカラ……
タッタッタッタッ……
タッ……タッ……
タッ
翔人は足を止めて、意を決して振り向いてみた。どうせ自分が足を止めても、足音の主は知らん顔で足を止めることもなく通り過ぎて行き、結局自分の考えに笑ってしまうことになるのだ。
ゴクリ
ところが振り返った翔人は予想外の状況に息をのんだ。
誰もいない……
翔人は軽く背筋に寒いものを感じて自転車に飛び乗った。

＊

思えば、なぜ実行という男が消えてすぐに自転車に乗らなかったのだろうか。翔人は疑問に思う。
翔人は自転車に飛び乗ってからずっと、自転車を立ってこぎ続け、猛スピードで帰路を走っていた。
ここからショートカットのため、割と大きな児童公園を突っ切る。舗装されていないグラウンドも通らなければならないが、地面は十分乾いているので問題なく走れるはずだ。
この公園を抜ければ家はすぐそこだ。
ガクッ
そんなことを考えながら、自転車が舗装された道路から土のグラウンドに入る瞬間、いきなり

ハンドルがとられた。
「うおッ！」
　気がついたときには、翔人の体は自転車から投げ出され宙を舞っていた。
　ズブシャッ
　派手な音を立てて、翔人が地面に落ちる。
　落ちた先は、もはや土の地面とは呼べないものだった。
　ズブブッ
　翔人が痛む体を起こす。髪から、服から、水がしたたり落ちる。
　水。
　そう、水だ。見渡せる限り全ての地面が、まるで台風が去った後のように、水たまりで覆われている。しかも、まるで何日もその状態のままであったかのように、水の下の地面はやわらかく、たよりない。
「いてて……。なんなんだよ……」
　翔人は思わずつぶやく。自転車がこの水たまりに入った瞬間、前輪が深く地面に潜り込んで固定されてしまったのだ。慣性に従って、後輪が大きく跳ね上がり、翔人は投げ出されてしまったというわけだ。
　痛みと、落ちた際に飲んだ泥に顔を歪ませながらも、翔人は極力冷静に考えようとする。
　近頃雨は降っていない。単なる水まきのレベルでないことは見れば明らかだし、そもそもゲリラ豪雨でもないとこうはならない。おまけに舗装されている場所は、ぬれてすらいなかった。
　異常。
　いくら冷静に考えようとしても、翔人の頭はそれ以外の言葉をイメージしない。痛みですら、さほど訴えかけてはこない。
「ずいぶんあっけなく引っかかるのだな」
　茫然自失とする翔人を照らしていた街灯が、唐突に遮られた。翔人が未だ、自失を抜けきらぬまま、そちらに顔を向けると黒い男が立っていた。
　逆光、ではない。着ているもの全てが黒いのだ。サングラスをしていない目はも吸い込まれそうなほど黒かった。
「お前、いったい何者だ」
　男が翔人に静かに、しかし威圧的に問いかけてくる。翔人はお前こそ何者だ、と返そうとした。その瞬間、脳裏にひらめくものがあった。
　喫茶店に居たはずなのに、葉月さんやマスターが知らないと答えた男。
　前の席に座った男子学生が言っていた、警察に捕まらない変質者。
　翔人はそこでようやく自失状態を抜けた。弾かれたように立ち上がって男と距離をとる。
「お前がこの町を守護する陰陽師なのか」
「……」
　翔人は答えない。ただ、男をにらむだけだ。ただそれも、男が放つ圧力に屈しそうになる。
「この町の状況がわかっているのか。このままではこの町に住む人々は不幸のまま他の土地に移っていくことになるのだぞ」

　男はまた問いかけてくる。その目の爛々とした輝きに翔人の足は震えてしまう。翔人はそれを隠すので必死だった。
「この町の成り立ちが正しいと思っているのか。それとも先祖からの惰性で守っているのか。」
　意味がわからない。だが翔人はやはり何も答えないでおいた。
「もういい。どちらにしてもおまえがこの町の陰陽を司ることは間違いないからな。邪魔はされないことに越したことはない」
　やばい、と翔人は思った。男の言葉が終わる瞬間には、翔人は泥を跳ね上げて跳んでいた。
　ザッ
　一瞬早く跳ね上がった男の右手が、翔人を左下から右上方へ切り裂いていた。
　ビシャアッ
「ぐうっ」
　翔人は受け身もとれずに再び泥につっこんでいた。男の手が当たった箇所から出血している。感覚的には傷は思ったよりは浅いようだが、この状況ではさして幸運とも思えない。
「はあっ、はあっ」
　出血がおもったよりも多いのか、翔人の意識はだんだんと朦朧としてきた。
　ひとちがいだ、と今更叫んだ所で無意味だろう。なにせ相手はそんなこと考えもせず、素手で斬りつけてくるような奴なのだから。
「無様だな。抵抗もせずそうして地面にはいつくばるだけとは」
　すぐそばに立って見下ろしてくる男の目がやけにぎらぎらして見えた。そして男が手を振り上げるのも。
「私がこの町を無くすのをあの世でじっくりみているがいい」
　翔人の意識はそこで暗転した。こんな所で死ぬのか、と漠然と思って。
「っ？」
　男が手を振り下ろそうとした刹那、手の中に収まるほどの大きさの何かが飛来した。そして、まばゆい光が地面から放たれた。男も思わず目をつむってしまう。
「なんだ、一体……」
　男が目を開き目が再び闇になれると、傷つき倒れた翔人の姿はそこにはなかった。周りを見回しても人影はおろか、水浸しの地面には足跡すらない。
　あの光は陰陽道の術によるものだろう。だがあの傷で一瞬で逃げ切れるものなのか。まさか自分の力を悟られないよう、隠していたというのか。
　だとしたらあの少年、一体どれほどの使い手だと言うのだ。男はいくつもの疑念を抱えて、公園を後にした。

「ふああ」
　早朝の日差しにめざめて翔人はあくびをした。
「えと……」
　周りを見回してみる。家の近くの公園だ。グラウンドはその乾いた大地をあらわにしている。地面に突いた手の近くにぐしゃぐしゃになった紙が落ちている。
　ああ、これは水に濡れたのだな、それも大量の。翔人は漠然と思った。
　水。
　そのことに思い当たった瞬間、まるで濁流のように昨日の出来事が頭の中に押し寄せてきた。
　フラッシュバック。
　そんな言葉が、いかに的を得ているか、翔人は体で感じ取った。
　怖い。
　怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。
　押し寄せてくる恐怖に翔人はふるえが止まらなくなった。
　圧倒的な暴力。町のそこらにいるちんぴらが虎ならば、あれはブラックホールだ。それ程までに次元が違う。
　翔人は恐怖に麻痺した心と体を引きずって、大急ぎで家に帰った。

＊

　ガクガクガク
　自分の部屋で翔人はベットに潜り込んでふるえていた。
　家に帰って、やはりまずは驚かれた。震える体を引きずって、まずはシャワーをあびて泥を落とした。昨日受けた傷はなぜか、もう何年も前の浅い傷のようにうっすらとした線を残すのみとなっていた。
　シャワーから出て服を着替えた翔人は、とりあえず家族にちんぴらと喧嘩して気絶していた、とだけ言った。あながち間違いとも言い切れない。大きく裂けたシャツを見て何も思わなかったわけがないが、母は何も言わなかった。
　翔人は怖くなっていた、どこかへ出かけるのが。一人で居るのは怖いが、家族と居れば巻き込むかもしれない。
　家であの男に襲われれば家族も否応なく巻き込まれてしまうのだが、どこか家以外で一人になるには翔人は小心すぎた。

＊

「なぜ今頃になって動く」
　翔人がいつも行く喫茶店で、いつものようにマスターはカウンターの影で折り紙を折っていた。

「なぜでしょうね」
　カウンターを挟んでマスターの目の前に座っている男が肩をすくめた。
　ひどく現実感のない男だった。狩衣に烏帽子をかぶった、れっきとした平安貴族である。生きた時代は戦国だが。名前を土御門実行といった。
「諦めている、のではなかったのか」
　マスターがまた、口を開く。その声は小さく、相手にというよりはむしろ、自分に対する声のようだ。
「わたしは、ただほんの少しだけヒントをあげただけですよ」
　実行は透き通った笑みを浮かべた。時刻は早朝。まだ客はもとより、マスターを除いて唯一の従業員すらまだ出勤していない。差し込んでくるまばゆいばかりの光の中で、その笑みはまるで雪のように見えた。
「それよりも、」
　実行が言葉を継いだ。すでにはかなさは消え、いたずらっぽい笑みを浮かべている。
「あなたこそどうして助けたんです
　本当は彼に期待してるのでは」
「一般人を巻き込まないのは当たり前だろう」
　マスターがやや憮然とした声で言った。
「おやおや。この期に及んでまだ彼を一般人と言いますか。」
　実行は呆れた、というように大げさに肩をすくめてみせる。
「客は他にも大勢いる」
「彼女に恋し、この店に彼ほど深く執着しているのは彼しかいないでしょう」
「……」
　実行の言葉にマスターは黙った。
「わたしも、街の滅びをただ待つ。それでいいと思っていた。何もしなくとも『気』の流れが悪くなった町はゆっくりと滅びへと向かっている。
　それが成り行きだ、と思っていた」
「いまは思っていないのか」
「ええ」
　マスターの問いかけに実行ははっきりと肯定した。この受動体を絵に描いたような男にはとても珍しいことだった。
「陰陽師になるような人種はみな、それぞれの考えに従って動く。
　あるがままに受け入れようとする我々がいる一方で、街の滅びを今すぐ際限なく加速させようとするものがいる。だったら街を延命させようとするものがいても、おかしくはないでしょう」
　実行の言葉にマスターは応えない。実行もマスターに問いかけている様子ではなかった。
「七十年前と同じように、彼が陰陽師になるとは限らない」
「そうですね。でもならない、とも限らない」
　マスターは黙って手を動かし続けた。

「ここの地下にも、『気』を導く結界を張るための呪符が埋まっているでしょう。
　あなたは赤の他人が結界を破るためだけに、この建物を破壊して彼女を含めたあなたたちの居場所を奪うことが許せるんですか」
　実行の真剣な声にも、マスターは答えない。

＊

　およそ七十年前。
　確かにその日付は今から七十数年前を示していた。
　翔人が手にしているのは数冊のノートだ。以前倉庫の本が床に散乱した際、なぜか本の数冊が入らなくなってしまった。元々どう入っていたかわからないためどう詰め込んでいいか分からなかったのだ。
　それでその余ってしまった本を数冊、翔人は自分の部屋に持ってきていた。
　帰ってきてから数時間。だいぶ落ち着いてきてはいた。家族に話すにしても、警察に話すにしても、話が突拍子もなさ過ぎて信じてもらえそうにないが、さすがに襲われていれば信じてもらえるだろう。だからいつ襲われてもいいよう携帯は常に身につけておいた。
　鬱々と恐れていてもしかたない。そう考えて翔人は本でも読もう、と思った。幸い翔人は部屋にたくさんの本を持っていた。
　そう思って、ベットを出ると机の上の本が目に入った。手に取ると、それは本と言うよりはノートだった。そこに書かれている最後の日付が七十数年前の物なのだ。
　パラリ
　翔人は表紙をめくってみた。ぎっしりと、細かい文字が書かれている。どうやら誰かの日記のようだ。
　翔人自身も日記をつけているので、人の日記を読む事にはためらいを覚えないでもなかったが、なにせ七十数年も前の物だ。書いた人物は既に亡くなっているだろうし、時効だ。そう思って読み始めた。
　パラリ
　一ページづつ、丹念に読んでいく。日記は書き手が十歳の日から始まっていた。一人称が僕なので、たぶん男だろう。
　初めのうちは、この町がいかに自然豊かで幸福な街かが伝わってくる内容だった。
　友達と川で遊んだり、虫を捕まえたり、肝試しをしたり――
　だが、そんな状況は書き手が大きくなるに従って変わってくる。まるで今のこの街のように治安が悪くなりちんぴらが街を闊歩するようになる。
　書き手はそんな状況に怒りを抱いていた。
　しかし、ある日状況が一変する。
　陰陽師。
　この言葉を日記の中に見つけて翔人は愕然とした。昨日の黒い男も、実行と名乗った男も陰陽師がどうのこうのと言っていた。

　そこにはこんな事が書いてあった。
　『僕は驚くべき事を知ってしまった。この我が愛すべき街が、戦国時代に端を発すとは知っていた。だが、そこに当時の陰陽師が関わり陰陽道的配置をもって街を栄えさせようとしたということなど知らなかった。ましてや、その陰陽道的施工は今や近代的建築によって破られようとしており、このままでは街はいづれ滅んでしまうということも。
　陰陽師が我が家から途絶えて久しい。もはやその技術は再現のしようもない。
　だが僕はがんばってみようと思う。○○が僕に少しばかり手ほどきをしてくれるという。ありがたい申し出だ。僕には思いを伝えなければならない人がいるのだから。』
　○○の部分は字が乱れていて、なんと書いてあるか分からなかった。
　陰陽道。昨日の男が使っていた力はたぶんそれによる物だろう。本道に信じられないことだけれど……
　最後まで読むと、この書き手は陰陽師になってその破れをなくすのに尽力したらしい事が分かった。最後の日付は彼が出征した日と、別の人物の字で書いてあった。おそらく奥さんが書き足したのだろう。
　日記を読んでいて、思い当たるところがいくつもあった。
　昔は栄えていたのにだんだん治安も景気も悪くなってくる街。
　日記にはこの町が滅び行く、とかいてあり、昨日の男も滅び行く街がどうのこうの、と言っていた。七十数年前にもはや破れそうだったならば、いまはどうだろう？この書き手がどれだけ努力して改善できたのかは知らないが、それからかなりの時間がたち、街も変わっている。その破れはかなり広がっているだろう。
　どうやらこの町は滅びに向かっているらしい。

＊

「はあ。近頃彼、土門さん、来ませんね」
　店を閉めて、掃除をしながら葉月が言った。
「なんだい。葉月ちゃん、翔人くんの事が気になるんだ」
　マスターは、洗い物をする手を止めて返した。
「え、いやその、違いますよ！
　だってもう三日ですよ。彼が最後に来てから。いままでこんなに彼が来なかったこと無かったじゃないですか」
「でもそれって結局は気になるって事だよね」
　マスターの指摘に葉月は顔を赤くして、軽く睨みつけた。
　はっはっはっはっは、とマスターはひとしきり笑って
「ごめんごめん。少しからかいすぎたね」
と謝った。
　カラン、カラン
　そこでドアベルが鳴って、一人の男が入ってきた。白い平安貴族が着るような服に長くて編ん

で作られた帽子のような物をかぶった若い男だ。かなり顔立ちの整った男でもある。
　彼はこの店の常連の一人である。葉月が何度名前を尋ねてもそのたびにはぐらかされて教えてもらえない。そしてどうやらマスターの友人でもあるらしい。
「では葉月さん。彼の様子を見に行ったらどうです」
「へ？」
　男の突拍子もない提案に、葉月は間の抜けた声を上げてしまう。チッ、とマスターが舌打ちするのが聞こえた。どうしてだろう、いつもはそんな事する人じゃないのに、と葉月は感じた。
「どうして、いきなりそんなことをいきなり言うんだい？」
「いえいえ。別に盗み聞きするつもりは無かったのですが。わたしは他の人よりも少しばかり耳がよい物で。店の外でも聞こえてしまったんです」
　マスターの問いかけに、男はさらりと答える。
「実は私、こんな物を拾いまして」
　男は袖から財布を取り出してカウンターの片隅においた。
「あ、それって」
「翔人くんのだね」
　マスターの言うとおり、それはいつも翔人が使っていた物だ。
「なかにこんな物が入っていました」
そういって男が中からとりだしたのは学生証だった。たしかにそこには彼の、土門翔人の顔写真と名前、住所が書いてあった。
「でもそれはウエイトレスのすることじゃないよ」
　マスターが、やんわりと断った。しかし、その声の中になにか断固とした物を葉月は感じ取った。
「しっていますよ」
男はしれっとした声で続けた。
「だから、これはウエイトレスとしての葉月さんではなく、一人の知り合いとしての葉月さんにお願いしているのです」
　男はにっこりと笑った。まるでいたずら好きの少年のように。

翔人が家に帰ってから、三日がたった。翔人は学校にも行かずただひたすら部屋にこもっていた。
まずは部屋に持ってきた日記と陰陽道の本を読みあさった。『気』とやらの流れが悪くなるとどうなるのか。無くなるとどうなるのか。知りたくなったからだ。
答えはあっさりと出た。倉庫から持ってきた本の中の一冊に入門書のような物があり、それには気について細かく記載していた。
『気、というのはすなわち木火土金水の五気に別れ、この五つは生命にとって欠かせぬ物である。……(中略）……人が古くから住まう場所というのは、概ねこれらの気が十分に流れている。
しかし、気の濃い場所があるのと同様、薄い場所も確かに存在する。気が濃い場所では人は活発になり、明るく生活することができることが多く、また人々はこれらの場所に引きつけられやすい。反対に薄い、あるいは気が無い場所では人々は暗く、鬱々としたり注意力が散漫になり本領を発揮できないことが多い。また人々はこれらの土地を嫌う傾向がある。
有史以来、気の流れがない場所に防衛上等の都合から作られた都市がいくつか存在するが、これらの都市は陰陽道の見地から深く細工が施され、人が生活するのに適切な濃さの気を配置するよう配慮されている。
この気を導く方法には様々な種類があるが、最も一般的な方法は町とする領域を、四つの辺が東西南北のそれぞれに向かうような正八角形で囲うような場所を選んで、対応する呪符を地面に埋めることだ。（対応表は巻末第百八十一項に示す）
これらの都市には陰陽道的見地から都市を調整する陰陽師が常駐しているが、彼らがいなくなった都市は治安が乱れ、種々の事故が頻発し次第に人は都市を離れていき、最終的には人の住まぬ原野に戻る。
このようになった都市は全国にいくつも存在する。』
これは『一九二六年版陰陽道入門（土御門春風著）』からの抜粋だ。
ようするにこのままだと、治安がさらに悪くなり、事故が頻発し、最終的には人がいなくなるらしい。
あの男は『私がこの町を滅ぼす……』と言っていた。つまり奴は日記の書き手のいう『破れ』とやらを大きくするつもりなのだろう。
はは
翔人はこのことを理解したとき思わず笑ってしまった。
それだけか。
正直な感想である。別に全員が死ぬとか、国が滅ぶとか、戦争が起こるとかそんなことは起こらない。
ただ、一つの街が無くなるだけ。それも人が別の土地に移るだけ。
自分が生まれてからずっと過ごしてきた町が無くなるというのは確かに寂しい気もするが、本当にそれだけだ。歴史上廃墟になった都市というのは数多く存在するし、これからも増え続けるだろう。
たしかにこの町でやり残したことは多くある。でもあんな恐ろしい思いをするほど価値がある、とも思えない。

　結局はそれだけのことだ。そういえばニュースで様々な建物が謎の倒壊をしていると言っていた。あれはこの破れを大きくするためだったのだ。
　もうすぐこの町は終わるのだ。みながどこか他の場所に移っていく。大学をもう三日だが当然誰も何も言ってこない。大学とはそういうところだし、なにせ『気』の流れが乱れているのだ。みんな僕にかまっている場合じゃないだろう、と翔人は自嘲してしまう。
　大学も移転するかもしれない。なにも、できることはない。
　もう、知り合いともお別れか、と思うと葉月のことが頭の片隅をよぎった。でもどうしようもない。
　そう思ったら猛烈な虚無感に襲われて、翔人はそれからずっとベッドでぐだぐだとしていた。
　ピンポーン
　唐突にインターホンが鳴ったのが聞こえた。
まあいい。母が応対するだろう。そう思って翔人はベッドの上で寝返りをうった。ところがすぐに
「翔人ー、お客さんよー」
と階下で呼ぶ声が聞こえた。今度こそ翔人はベッドから出なくてはいけなかった。

＊

「葉月さん……」
「よかった。覚えてくれてたんですね」
　翔人が玄関から出て行くと門の向こう側で、彼女は少し不安そうな顔をしていたが、声をかけるといつもの笑顔にもどった。
「あの、これ」
　彼女が門の向こうから翔人に差し出したのは、財布だった。
「あ、僕の財布……」
「お店に届けてくれた人がいたんです」
　受け取るとき、彼女の白い指と翔人の指がかすかに触れあった。暖かかった。
「あ、ありがとうございます」
「いえいえ。お礼はその人に言ってください。常連さんだから、今度会ったら紹介しますね。
　それと、またお店に来てくださいね」
　葉月はいつものように笑っていた。
　彼女は知っているのだろうか。次の機会はたぶん無いことを。あの男によって、この町そのものが無くなり、皆が散り散りになってしまうことを。
　そんなことが、漠然と頭をよぎった時、何かもやもやとした言いようのない不快感を翔人は覚えた。
「じゃ、これで。さよなら」
　日が沈んで薄暗くなった中、踵を返して葉月は去ってゆく。

とても懐かしい不快感だった。何かしようと思うのに何をしていいのか分からなかったあの頃。何かしなければ、と圧迫感があるのに何をすべきかわからなかったあの頃。
あの喫茶店に行くようになってから少しずつ、でも確実に薄れていった感触。
ただその中に一つだけ、はっきりとしていることがあった。
今のままだったら。後で必ず後悔する。
「ま、待ってください。」
その一念で彼女の背中に声をかけた。うん？と返事をして彼女は振り返った。
「そ、その……、お、送っていきます」
急に緊張してどもってしまったが、翔人なりの精一杯だった。彼女はすこし顔を赤らめて、はいと頷いてくれた。

＊

「なんか、悩んでます？」
「え？なんで分かったんですか」
見透かされた事に驚いて翔人が返すと、葉月はへへへ、と声を漏らした。となりを歩いていた
「常連さんですから」
「はあ」
いくら常連だからといってそこまで分かるものなのだろうか。それにだとしたら彼女は一体何人の心が分かるのだろうか、と翔人は不思議に思ってしまう。
彼女に聞くと駅に行く、と言った。送っていく、と言った翔人と葉月は並んで駅までの道を歩いていた。
あたりは暗くなっているが、街灯のある道なので問題はない。
「すっごい無理そうなことがあるんです。自分じゃどうしようもないことが。」
翔人は気づいたら話し始めていた。さすがに陰陽道の事は話せなかったが。
「翔人さんは、どうしたいんですか」
「僕ですか。正直分からないんです」
翔人が答えると、葉月はううむ、とうなった。
「それは、分からないんじゃないんですか？ホントは自分でもどうしたいか分かってる」
「へ？」
「普通、分からない人は迷わないと思います。自分がしたいと思うことがあるけど、できるか分からない、って思ってる人が悩むんですよ」
葉月はあっさりと言った。その声には攻める風もなく、ただ淡々と思ったことを述べているようだった。翔人は、その通りかもしれない、と感じた。
「そうかもしれません。でも、どうにかしようにも、そのことを解決する手段では僕、門外漢なんです。僕、何にも才能無いし」
話しているうちに、つい本音が出てしまった。翔人はまずい、と思い「何でもないんです、何でも！ははは」と取り繕った。葉月は最初、あっけにとられていたが、すぐにまた、話し始めた

。
「前に言いましたよね。私に、『一人で大変ですね』って。わたしは『楽しいですよ』って答えたと思うんですけど。
　あれ、実は嘘なんです」
「へ？」
　いきなり全く別の話をされた事に翔人は間の抜けた声を出してしまった。が、彼女は気にした風もなく言葉を紡いでいく。内緒ですよ、と前置きして彼女は続けた。
「ほんとは、めんどくさいな、たいへんだなって思う時が大半なんです。うちはただの喫茶店なのに、メニューが少ないってクレームつけてきたり、しつこく言い寄ってきたり、ほんとうざいって思っちゃうときもあるんですよ。
　でもウエイトレスだから、そんな時でも笑顔で応対しなきゃいけない。前、そういう時もマスターに笑顔が引きつってるよ、って言われた事があるんです。
　喫茶店で働くための才能があったら、そんなときでも、ちゃんと笑って応対できるのになぁ、って思っちゃいます」
　葉月はえへへ、と照れたように笑う。
「それに喫茶店だから、いろんな事話てるお客さんがいるじゃないですか。私にじゃなくても、マスターとか、お客さん同士でとか。
　そういうときって、たいてい話が聞こえちゃうんですよね〜〜」
　葉月さんってそんなことおもってたんだ……、僕が来たときも、また来た。うざいとかおもってたのかな、などと翔人がいささか心配になっていると彼女は「もしかして、ひいちゃいました？」とやや早口に聞いてきた。翔人はふるふる、と首を振ることしかできなかった。まさか「はい。すこし」などと答えるわけにも行かない。
「いいんです。わたしもウエイトレスとしてだめだな、っては思うんです。才能ないなぁって」
　彼女は苦笑して遠くを見た。
「でも。どうしてもやめられないんです。
　そういう話を聞くと、思っちゃうんです。わたしでも何かできるんだ、って。
　話してる当人たちはたぶん気づいてない。でもその人たちは確かにわたしの働く喫茶店に来て、少しだけ休憩して、またその人たちの生活に戻っていく。
　その人たちにはたぶんわたしなんて喫茶店で働くただのウエイトレスですよね。でもわたしは確かにその喫茶店で、その人の生活のほんの一部でも担うことができる。そう思っちゃうんです。
　だから、喫茶店を出て元気に帰っていくお客さんの背中をみると、少しだけでもその人の生活に貢献できたかな、っておもえるんです」
　そんなのただの自己満足だって、わかってはいるんですけどね、と付け加えてから彼女は続けた。
「でも、自己満足でもわたしはそう思えるから、幸せなんです。楽しいんです」
「……」
　彼女が話し終えてすぐに、二人は駅の改札口に着いていた。翔人は彼女の話に聞き入りすぎて

いて、立ち止まってはじめてはっきりと認識した。
「才能って、結局ただの助けだと思うんです。やりたい事があるとき、もしあればあるに超した事はないけど、無ければ無いでやっていける。そう言う物だって。
　あ、ごめんなさい、なんか偉そうな考えなんですけど」
「いいんです。だいぶ楽になりました」
　翔人は首を振る。
「自分のなやみとか話すのって、少し恥ずかしいですね」
　葉月がはにかんだように笑い、つられて翔人も笑ってしまった。
「それじゃ、また。お店来てくださいね」
「はい。かならず行きますよ」
　最後に短い言葉を交わすと、葉月は改札口をくぐって階段のさきへ消えていった。
　ほっ
　翔人はひとつ、安堵の息をついた。やはり、自分が抱いていたまぶしさは幻だった。
　やはり彼女も自分と同じ、ただの人。彼女だって悩むときや大変な時はある。でも、それでも、彼女は笑顔を絶やさない。他の人を幸せに協力するために。そして自分自身の幸せのために。
　話が終わったとき、彼女はこのまま駅構内のファーストフードによっていかないか、と提案してくれた。そうなったら彼女ともっともっと話をする事ができただろう。それはとても心惹かれる提案だった。
　でも、彼女と話す事はこれからだってたくさんできるかもしれない。それは翔人のがんばり次第だ。
　だから、翔人は申し出を断った。やらなければならないことができたから。

翔人は葉月と分かれて帰ってから、まず近頃頻発していた謎の建物の破壊事件について調べた。場所と時間、壊され方、残されていた物。何から何まで公開されている物はすべてメモした。
　その後は陰陽道の本を片っ端から読みあさった。まずは部屋に持ってきていた物を。それを読み切ると、ある程度何が自分に必要かわかってきた。
　自分はあの男に挑まなくてはならない。それも相手の目的が完遂する前に、だ。
　最後の事件は昨日の夜起こっていた。今まで起こった事件は７件で、実行は呪符は八つと言っていたから残り一件でこの町にかかる陰陽道的結界は消滅してしまうことになる。
　事件の間隔はどれも二、三日だから、早ければ明日の夜、遅くとも明日の夜にはあの男の目的が完遂されてしまう。たったそれだけの期間の付け焼き刃の知識で、ど素人の自分があの男を圧倒できるとはとうてい思えない。
自分に才能があるとは思えないから。だが翔人は諦めていない。
　ようは、男を止められればいいのだ。
　翔人は図書館で印刷した町の地図を広げた。そこには既に破壊された建物の場所が記されていた。
　散らばった七つの点。それは円を描くように町をほぼ一周しかけていた。後一カ所。それで円が完成する。
　最後の場所はなじみ深い場所だ。

＊

　ザッ
「ようやく見つけたぞ」
　男は地面を踏みしめて舗装されないままの駐車場に入った。
　街灯すら設置されていない道路のそばで南から月の光だけが男と男の標的とする建物を照らしている。
「やはり、きましたか」
　カラン、カラン、
　という音をたてて扉が開き、男が出てきた。
ひどく現実味の薄い男だ。格好は平安貴族風。
「申し遅れました。私はこの町に陰陽的施工を施し、気の流れをこの町に導いた陰陽師で、土御門実行と申します」
　目の前の所は今から五百年ほど前の大陰陽師の名前を名乗った。そして、その名は確かにこの町を気づいた人物のものでもある。
「どうしてだ」
「はい？」
　男の問いに実行は軽く首をひねった。動きがゆるい。
「なぜ作った本人がいて、これほどまでに気の流れを歪ませる。なぜ矯正しようとしない」
「それも時代の流れです」

　実行は肩をすくめた。
「もはやこの国は乱世になく、防衛上の都合を答う必要はない。人々がこの町の様式を守らない、というのならそれも時代の流れ。
　たとえ治安が悪くなろうと、事故が多発しようと、人々の心に悪しきものがすくうようになろうと、それはすべて彼ら自身の決めたこと。
　そしてこの町が無くなろうと、人々はどこか他の場所で生き続けていく。ここよりももっともっと便利で快適な場所で。
　ならそれでいいではないですか。陰陽道の
呪符を使った結界で、気のない場所に気をひくなど、もはや必要のないことなのですよ」
　実行は淡々と答えた。
「いますぐ結界を解かないのも、時代の流れに従うため、ということか」
「まあ、そうなりますね」
　実行の答えに男は頷いた。
「なら私のすることに文句はないな。これも陰陽道の身内の恥をさらすまいとする時代の流れなのだから」
「ええ」
　男の問いかけに実行はわらって応じた。その笑いはニヤニヤとした、いたずら小僧の物だ。まるでこれからとても楽しいことが始まる、とでも言いたげな……
「でも、」
　男がいぶかっていると、実行は再度口を開いた。
「あなたには感じられませんか？再び整備された気の心地よい流れが。」
　カラン、カラン
　なに？と男が聞き返す前に再び喫茶店のドアが開いた。
「あんたが壊したところも含めて、僕が新しく結界を施させてもらったよ」
　出てきたのは、あの少年だった。初めて男があの少年を見たときはただの一般人だと思っていた。
　しかし、喫茶店の入り口ですれ違った時、少年ははっきりとこちらを認識していた。こちらが他人に認識されにくくなる『人払いの結界』を張っていたのにもかかわらず、だ。
　次の日、喫茶店から出てくるところを見計らって尾行すると、逆に『人払いの結界』でまかれた。
　しかたなく町中に様々な『網』をはると、あっけないほど簡単に引っかかったが、彼自身か、あるいは他者による術かは知らないが、結局彼を見失ってしまっている。
　事前にこの町を調べた情報屋によると、この町には陰陽師が絶えて久しいという。そんな状況だから、男もこの町を無くそう、と思ったのだ。
　とにかく、彼についての情報はない。どれだけの力量かも正直男には測りかねていた。
　ただ一般人に毛が生えた程度かもしれないし、逆に情報屋を出し抜けるほどの力量かもしれない。

「この町は、無くさせない」
少年が強く言った。

＊

　翔人が実行の前に出る。
　ゴクリ
　翔人は実行と男の話を喫茶店の中で聞いていた。だが目の前に男をみて、思わずつばを飲んでいた。
　先日の戦いで力量差はよく分かっている。男の目を見るだけであのときの恐怖がよみがえってくる。
「なぜだ。なぜそんなことが言える」
　男がそのギラギラとした目を輝かせて問いかけてくる。月明かりの中たたずむその姿はまるで走り出す前の猛獣のようだ。
「陰陽道なんて関係ないからだ」
　なんだと、と男が眉をひそめる。
「はっきり言って、ここに住む人に陰陽道なんて関係ない。みんなそれを知らないところで生まれて、知らないところで暮らしている。
　『気』の存在すら知らない彼らには、『気』の流れが乱れているから、なんて理由で住処を奪われるのは迷惑なんだよ！」
　翔人はたたき付けるように言った。まるで、さっきからガクガクと小さく震える足を鼓舞するように。
「だが、放っておけばいづれこの町は無くなる。気の流れがほぼ消滅して、人々はこの土地を離れていく。その過程では多くの人が不幸になるぞ」
　男は淡々と続ける。大丈夫か。まるで動揺していないように見えるが……
「だからそれが迷惑なんだよ！今いる人はこんな町でも一生懸命生きてるんだ。
　それを壊す権利はあんたにも、陰陽道とやらにも、ない。
　わかったらとっととお引き取り願う！」
　ククククク
　ハーッハハッハ
　突如として男が笑い始めた。実行もニヤニヤと笑っている。
「おもしろい。本当におもしろい事を言う少年だな、おまえは。
　だが事実としてここは滅ぶ。お前のその浅はかな選択のせいで私が結界を破るのをやめれば、実際に今幸福の人が不幸になるのだぞ。その覚悟があるのか！」
　男の大喝に翔人はびくりと体を震わせた。だが、それだけだ。翔人はゆっくりと言葉を紡いだ。
「覚悟は、ないよ」
　その言葉にそれみたことか、と言おうとして、男が口を開く。

　だが、翔人が言葉をつなぐ方が早かった。
「あんたは見たことがないのか。この喫茶店を」
　今度は翔人が問いかける。
「その時見なかったのか。ここに来ている人の笑顔を。働く人の笑顔を。
　ここにある幸せを」
　男は黙って聞いている。
「たしかに、この町は『気』の流れが悪くなってるとかで、すさんでるかもしれない。でも、こんな場所がある限り、最悪の事態にはならない。僕はそう信じている」
　翔人はどこまでもまっすぐに、男を見据える。まるでその先の闇を射通すように。
「だから僕は、この町を守護する。今この瞬間から、僕がこの町の陰陽師だ。
　誰にも邪魔させない」
「もし、わたしが力ずくで結界を破る、といったら」
「その時は、戦う」
　翔人は静かに告げる。手にはどれだけ使えるか解らないが、本から書き写してきたがある。懐にはナイフがある。
　もちろんはったりだ。もし相手が本気になれば、その程度の物で抑えられるとはとうてい思えない。
　男は翔人の答えに口をつぐんだ。翔人はただ、男を見据えたまま、動かない。
　男の目がギラリと光ったように翔人には感じられた。

＊

「誰にも邪魔させない」
　その言葉を聞いて、実行は思い出していた。もう七十年以上も前のことだ。一人の少年が、この町を守るために陰陽師になった。いや、その時だけじゃない。この町が危機にさらされるたび、陰陽師が出てきた。
　実行は、ただ町を見守るだけだ。結界の維持に手を貸すことはできても、維持そのものができるわけではない。結界の力は彼の力と同意だが、やぶれた結界では彼の力はないに等しい。
　それでも、実行はずっと町を見守ってきた。
　翔人のこともだ。
　もともと、彼は正義感の強い、まじめな子供だった。でも世間はやはり厳しい。
　まじめは他の子供たちから反感をかい、正義感はうざい、と認識され始める。
　もちろん、実行はなぜ彼がテニスをやめたかを知っている。その原因は、彼の努力を恐れた転校生の悪意だと言うことも知っている。
　けれど、実行に介入は許されなかった。なぜなら彼はこの町の全てを見守る物だから。ただ一人に介入することは許されなかった。
　実行はただ、見続ける事にした。以前からずっと続けてきたように。ただひたすらに見守るだけだ。

運命とは解らないものだ。自分の居場所を、見失いかけた彼と、葉月が出会った。
葉月だって、決して幸福な人生を送ってきたわけではない。彼女は高卒であの喫茶店で働き始めた。それ以来、一年。彼女は立派なウエイトレスに成長した。その間の苦労を語る言葉を実行は持っていない。
それでも葉月はそれを語らない。マスターに対して。実行に対して。そして翔人に対して。そのある種の虚勢が、翔人を変えたのだ。
その意味で、本当にこの町を救ったのは彼女かもしれない。
翔人の方を見ていた男がゆっくりとこちらに視線を移すのが実行には分かった。
今、翔人の活躍で結界はほぼ修復されている。結界の力が戻っていると言うことは、実行のちからも戻っている、と言うことを意味する。
実行はいたずらっぽく、男に笑いかけた。
男の視線が再び翔人に戻っていく。

＊

「いいだろう」
「へ？」
「今回は、退こう。
だが忘れるな。少しでも気が乱れ、陰陽道の恥をさらすと判断すれば……」
タラリ
翔人のほほを冷たい汗がつたった。
「もう出会う機会がないよう祈っている」
男はそう言い残して夜の闇に消えていった。

＊

「結構あっさりひいてくれたな。そんなあっさりひいてくれるなら、最初っからこなきゃいいのに」
「もともと彼も結界を破って町を無くす事には乗り気ではなかったのでしょう。
ま、気の流れが乱れたままだと、陰陽道全体の恥になる、そう考えての行動といったところでしょうか」
翔人のつぶやきに実行は冷ややかに応じた。
その中には、決して自分とは相容れない、という強い拒絶がかいま見えた。が、すぐに声を明るくして翔人に言った。
「いや、見事な説得術でした。さすがですね、翔人」
「そうでもないよ。あそこで力押しされたらどうにもならなかっただろうし」
翔人は自転車をひきながら、答えた。

「だからこその説得でしょう。翔人のつたない知識であの男と渡り合うのは至難のわざですからねえ」
　実行があっけらかんと笑うので、翔人は少し機嫌が悪くなった。同時に彼のコロコロと変わる表情に、少し疑問を感じてしまう。どちらが彼の本質だろうか、と。
「でもさ助かったよ。実行が教えてくれなかったら、こんな短時間で七カ所の呪符を直すことはできなかった。
　ありがとう」
　呪符があった場所の一つ目に翔人が行くと、そこでは既に実行が待っていた。呪符はすでに家で本を見ながら書いてきていたが、（何度も失敗して、部屋には失敗してぐちゃぐちゃになった半紙が散らばっている）掘り返された穴のどこにどのように埋めるかについては実行きが指示してくれたのだった。
　翔人が礼を言うと、実行は目を丸くした。
「なんだよ」
「いえ……。あなたが他人に素直に礼を言うのはとても珍しいことですから」
「いや、お前と出会ったのはついこの前じゃんか」
「それもそうでした」
　翔人がつっこむと、実行はうっすらと笑った。
「では、ここで。これからも結界を守り続けるのは大変ですよ。陰陽師殿」
「わかってる。またな」
　二人は翔人の家の前に着いていた。短い言葉を交わすと、翔人は門を開けて入っていった。
「あなたのことなら昔から知っていますよ。いえ、あなただけじゃない。この町の全員のことをね」
　実行の言葉を大きく傾いた月だけが聞いていた。

「なるほど。それで退けた訳か」
「ええ」
　マスターが問いかけると、実行が笑って答えた。
「結界も修復したんだな」
「私は何もしていませんよ。ほとんど彼が行いました」
「それほど彼には才能があるのか」
「いいえ。彼、残念ながら才能はほとんどありませんね。もし彼が男と直接やり合おうとしていれば、殺されていましたね」
　実行は相変わらずニヤニヤと笑っている。マスターは肩をすくめた。
「たしかに彼に陰陽道のセンスはありませんよ。でも呪符を書いて埋めるだけなら、努力すればできることです
　大切なのは、自分にはセンスがない、と嘆いて諦めることではなく、できることでその『何か』をすることですよ」
「さすがに陰陽道の結界として町を五百年も見てきただけのことはあるな。すばらしい考え方だ」
「いえいえ。わたしはただの亡霊ですから」
「自分の子孫を陰陽道に巻き込めて嬉しいか」
「嬉しいも何も。陰陽師になろう、としたのは彼ですよ。
　私はただ見守るだけの亡霊ですから。そんな力はありません」
　実行はそこで肩をすくめて見せたが、すぐに
「おや」
と声を上げた。
　声がしたのでマスターが実行を見ると、既にそこには誰の姿もなかった。
「あれ？お客さん、来てませんでした？」
　キッチンにつづく暖簾から葉月が水を盆にのせて出てきていた。
「いや。誰も来てないよ」
「え？ホントですか。
　おかしいなぁ、誰かの声がしたと思ったんだけど……。」
　葉月は独り言のようにつぶやきながら奥へと入っていく。
「それなら今日は翔人君がくるかもねえ」
　マスターのつぶやきは穏やかに注ぐ日の光の中に消えていった。

＊

　ダダダダダッ
　ポンッ
　フェンスの向こうのコートで手前の少年が、ボールを打ち返していた。
　ダダダッ

　ボンッ
　ネットを挟んで向かい側の少年も、負けずに打ち返す。
　ポンッ
　ボンッ
「ねえ、君」
「はいっ！？」
　翔人がネットの向こうのテニスを見ていると、突如後ろから声をかけられた。
　話しかけてきたのは健康的に日焼けした体を白いテニスウエアに包んだ少年だった。この前話しかけてきた人とは違う人だ。
「ずっと見てるね。よかったらウチに入らないかい」
　さわやかな笑みだった。
　不安が翔人の口をついて出そうだったが、結局翔人は口にしなかった。
「未経験者ですけど、よろしくお願いします」
　翔人が、軽く頭を下げると、翔人の返事に少年は満足したように大きく頷いて、歩き出した。
　翔人が同じ場所から動いていないのに気づくと、フェンスの入り口で翔人を手招きする。
「まずは部員を紹介するよ」
　翔人は元気に返事をして駆けていった。

＊

　ポンッ
　ポンッ
　この街を守る陰陽師が、コートを駆け回ってははねるボールを打ち返していく。それをまぶしいばかりの陽の光の中見守る影があった。
　実行である。彼は今、コートのそばにある大学の校舎の屋上にいた。ここはフェンスもなく、コートがよく見えた。ここは立ち入り禁止でもあるのだが、彼にとっては造作もない事だった。
「意外と、才能あるのかもしれませんね」
　陰陽道の才能は、お世辞にもあるとはいえない。実行は彼が書いた呪符を失敗作を含めてはじめから見ていたが、はじめは正直ひどい物だった。だが、彼は五百枚以上の半紙を僅か二時間足らずで使い尽くし、飛躍的進歩を遂げた。努力のたまものだ。
「いや」
　実行は思い直す。確かに彼は、勉学においても、運動においても、容姿においても、あまり才気に恵まれているとは言い難い。それは彼を生まれたときから見ている実行が一番よく知っている。でも——。だからこそ思うのだ。他の人にはできない程の努力ができる。それが彼の才能ではないか、と。
　その昔、土御門実行であり、今はこの町の結界そのものとなった彼は、とても嬉しそうな笑みを浮かべた。

＊

「はい、どうぞ。レモンたっぷりです」
　葉月がテーブルに冷えたグラスをおいた。
　いつもの喫茶店である。時刻は既に閉店時間を回っているが、翔人が前を通りかかると、マスターが敷地の入り口の所で待っていた。マスターが「せっかくだから～」などと言って喫茶店に入れてくれたのだった。
「えっと、どうしてレモンたっぷりなんです」
　翔人がおずおずと聞くと、彼女はうん？と首をひねった。
「常連のお客さんが、今日翔人さんがテニスコートでテニスしてるのを見たっていったので。てっきりテニスのサークルとかに入部したのかな、と。
　ちがうんですか」
「いや、そうですけれど」
　情報早すぎですよ。翔人はそんなことを思ってしまう。葉月はよかった～と安堵の笑顔を浮かべた。
「だから、レモンたっぷりなんです。クエン酸は疲労に効くんです」
　と彼女は両手で拳を着くって力説してくる。
　はあ、と翔人は曖昧にうなづいて一口をつけた。
「まあ気にしないでくれたまえよ。葉月ちゃんは客にその話を聞いてから、それを作るって言って、用意してずっと待ってたわけだから」
「ッ！」
　ゲホッゲホッ
　マスターの言葉に翔人は驚いて、気管に紅茶が入ってしまった。それで翔人はむせてしまう。
　やはり酸っぱかったが、同時に甘かった。